

職場体験 感想文コンクール2025

タイトル	想いを紡ぐ	事務局	120
学校名	新庄市立新庄中学校	氏名	沼澤 ^{なおき} 直希

仕事体験に向かう前日、僕は胸の奥がざわついていました。薬剤師という仕事に憧れはありつつも、実際にどのような現場なのか、自分にどんな役割が果たせるのか、不安と期待が入り混じていたからです。幼い頃から親戚に薬剤師という存在がおり、また「薬屋のひとりごと」という本を手にとった経験もあったため、漠然と「専門的でかっこいい仕事」というイメージを持っていました。しかし、体験を終えた後の僕の中には、その一言では到底言い表せないほどの実感が残っています。そこには知識や技術だけでなく、人の命と向き合う強い責任感、そして何よりも「人のために尽くす熱い心」が込められていたのです。

薬局の自動ドアをくぐった瞬間、張り詰めた空気を感じました。白衣に身を包んだ薬剤師の方々がきびきびと動き回る姿は、まるで舞台の上でそれぞれの役割を演じる俳優のようでした。しかし、そこにあるのは現実でした。誰かの命や健康を守るために、一瞬の油断も許されない真剣さが漂っていたのです。

僕が最初に体験したのは「一包化」と呼ばれる作業でした。患者さんが服薬を間違えないように、複数の薬を飲む時間ごとにまとめてパックする工程です。小さな袋の中に薬を入れていくだけのように見えますが、その一つひとつに患者さんの一日がかかっています。もし一つでも間違いがあれば、それは健康を損なうどころか命に関わる可能性もあるのです。実際に手を動かしてみると、単純作業に思えた工程がいかに集中力を必要とするかを思い知らされました。薬剤師さんの横顔は真剣そのものでした。流れるような手つきで作業を進めながらも、常に「これは誰のための薬か」と意識しているのが伝わってきました。その姿を見ながら僕は、「ただ薬を仕分ける」のではなく、「安心を形にしている」のだと強く感じました。

次に僕が挑戦したのは、医療用麻薬の装置作りでした。最初にその名前を聞いたとき、思わず体が強張ってしまいました。重い病気と闘う患者さんにとって、痛みを和らげることは生活の質を保つうえで欠かせません。薬剤師の方が慎重に説明してくれた後、実際に器具を組み立てる作業を体験させてもらいました。ほんの一部に触れただけなのに、その工程の緊張感と重みが十分に伝わってきました。目の前にある装置が誰かの苦しみを少しでも和らげることにつながる—そう思った瞬間、薬の持つ「命を支える力」を肌で感じました。

その後、薬の説明を行うロールプレイに挑戦しました。相手役の人を前にして、薬の効果や飲み方を伝えるのですが、思った以上に言葉が出てきませんでした。専門用語を使えば使うほど、相手は首をかしげてしまう。僕は「伝える」ことの難しさを痛感しました。そこで薬剤師の方が実演を見せてくれました。柔らかい口調で、難しい言葉をわかりやすく言い換え、患者さんが納得するまで繰り返し説明する。その姿には知識の豊富さ以上に「寄り添う姿勢」が表れていました。「説明」とは、一方的に情報を与えるのではなく、相手が理解し安心できるように寄り添う行為なのだと、僕は深く学ぶことができました。

軟膏詰めめの作業も印象的でした。容器に軟膏を詰める作業は単純に見えますが、実際にやってみると、これが思った以上に難しい。力加減を間違えると気泡が入り、見た目も使い勝手も悪くなってしまいます。最初は失敗ばかりで落ち込みましたが、薬剤師の方が「すき間を作らないよう

に！」と声をかけてくださり、何度も挑戦する中で少しずつコツをつかめるようになりました。最後にきれいに詰められたとき、達成感と同時に「自分が手を抜けば、患者さんが不便を感じる」という責任の重さを実感しました。

体験の合間に伺った、ある薬剤師の方の言葉が、僕の心に深く刻み込まれています。

「最初は稼ぎのために働いていた。でも、気づいたら『お客様のために』が自分の原動力になっていたんだ。」

その一言に僕は衝撃を受けました。仕事とは自分の生活のためにするものだと単純に考えていた僕にとって、それは価値観を揺さぶられるような言葉でした。本物のプロフェッショナルは、ただ生計を立てるために働くのではない。目の前の人のために全力を尽くすことが、自らの誇りややりがいにつながっている。そこには「仕事に対する熱い姿勢」がある。その姿勢こそが、薬剤師という職業を支える土台なのだ、と僕は実感しました。

仕事体験を終えた帰り道、僕の胸は熱く高鳴っていました。薬剤師の仕事は、薬を扱うだけではない。患者さん一人ひとりの人生に寄り添い、安心と希望を届ける仕事なのだということを学んだからです。単なる「体験」ではなく、僕にとって「生き方を考える時間」となっていたように思います。

僕はこの経験を通して、自分自身も「人の役に立てる存在になりたい」と強く思うようになりました。将来、もし薬剤師の道を選ぶことができたなら、知識や技術を磨くだけではなく、目の前にいる人の笑顔を第一に考える人間でありたい。勉強や努力の先にあるのは、自分のためだけではなく誰かの安心のためである。その意識を持てたことが、今回の体験で得た最大の収穫だと思っています。

薬局で過ごした2日間は、僕の心に確かな足跡を残しました。これから先、勉強に行き詰まることや迷うことがあると思います。しかし、そのとき僕は、今回出会った薬剤師さんたちの姿を思い出すでしょう。静かに、しかし決して揺るがない情熱を胸に、人の力になるために働く、薬剤師の姿を。僕もまた、いつの日かそのような大人に成長したい。